主日礼拝　　2020年9月6日（日）

題　「自分を変える勇気」

テキスト：ローマの信徒への手紙１２章：１～８節

（聖書の個所は最後にあります。）

伝道者パウロは今まで、イスラエル人とローマ人や異邦人を含めた神の救いの計画について語って来ましたが、１２章からは「キリストにおける新しい生活」について語りかけています。つまり神の憐みを受けたキリスト者の生き方について語っているのです。これはキリスト教倫理とも言われます。
今日の聖書の言葉は今日の教会、今を生きるわたしたちへの呼びかけでもあります。ちなみにこの個所のことばは、年度初めの主日礼拝で行われている役員就任式でも読まれている個所です。

1:こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。

この個所のことばを読んで「そうだ」と思う人もいれば、「わたしはできてない。」と思う人もおられるのではないでしょうか。そういうわたしもその一人です。

「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」

「献身」ということばがあります。牧師になったり、教会に専心仕える働きをする人たちを献身者とか言ったりします。牧師は神によって新しい教会に派遣された時、「神さま、このわたしをこの教会のために用いてください。」と祈っています。考えて見れば、すべてのキリスト者は献身者なのだと思います。自分の体を少しでも神さまに喜ばれるように使う。これは決して義務や掟ではなく、神の招きに応える人間の側の自由な意思と決意による行動です。それが神への献げものであり、礼拝になるのだと言うのです。ここで体とは、他人肉体だけではなく、人格や精神と言われます。キリスト者は得てして、まじめで道徳的な人たちだと思います。自分でもまわりからもそうみられることが多いのではないでしょうか。

わたし自身を含めて誰であれ完全に自分をコントロールできる人はいないのではないでしょうか。自分はできていない。だめだと決めつける前に、すぐ前のことば「神の憐れみによって」ということばに心を止め

たいものです。

忘れてはならないのは、主イエスがご自分の体をわたしたち人間の罪（的外れ）のあがないとして、神に献げられたということです。神さまとイエスさまの愛なしに罪の贖いはなかったのです。旧約の時代には、動物が犠牲として献げられて神に対する人間の罪は贖われていましたが、時至って神の備えられた御子イエスの十字架の死のあがないによって決定的に人間の罪は贖われる時が来たのです。神さまの救いの計画の実現です。罪の贖いはただ一度、イエス・キリストによってのみ完全に行われたのです。そう信じるのです。信じてよいのです。キリストの贖いを受け入れて、罪を赦され愛に生きようとするそれがキリスト者のこの世での生き方なのです。パウロはそう教えてくれています。このパウロの書いたローマの信徒への手紙は、キリスト教の歴史において、アウグスティヌスやマルティン・ルターそして、メソジスト教会の創始者ジョン・ウェスレー、近年におしてはカール・バルトなどに深い感化を与え、彼らを通して教会や世界中に大きな影響を及ぼしたのです。

2:あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき､何が神の御心であるか､何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

「この世に倣ってはなりません。」とは、この世に妥協したり、同化しないということと言われます。模倣、まねをしないということです。

自分には出来ないとうずくまった状態で生きるのではなく、自分を変える勇気を持ち、心を新たにして自分を変えていただき、体を献げる生き方で神さまからの自由を得て、前に向かって生きて行けるのです。

「心を新たにして自分を変えていただき､」とは､聖化と言われます。この世での新しい生き方。キリストに基づく倫理となります。

パウロにとって、教えと倫理は決してバラバラではなく、生き方においてつながっているのです。

3:わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。

神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く生きるという生き方があるのです。自分を過大に評価してはいけませんし、逆に自分を過少に評価してもいけないと思うのです。「自分が行う自分への過大評価も過少評価も的外れ、つまり罪なのです。」ほんとに評価されるのはイエスさまと神さまのみなのです。わたしたちが祈り願ってさえいれば神の力である聖霊、慰めの御霊。育ててくださる御霊が、わたしたち一人一人を内から成長させてくださるのです。

そして４節以下に記されているように、キリスト体である、教会、イエスにある群れ、教会共同体の中で、神さまのさまざまな愛の働きである「預言、奉仕、教え、勧め、施し、指導、慈善」など、神さまが各自に与えてくださった賜物、力を感謝して自由に愛を持って発揮して生きて行ってよいのです。

今日はこの後、久しぶりに聖餐式を行います。神さまはこの聖餐を通して、わたしたち一人ひとりに教会にキリストの大きな贖いの愛と自由の恵みを注いでくださいます。
わたしたちも共に聖餐に与り、主イエスにあってつながる心を大切にしてここから歩み出したいと願います。

◆キリストにおける新しい生活

1:こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。
2:あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。
3:わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。
4:というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、
5:わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっ

ており、各自は互いに部分なのです。
6:わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、
7:奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、
8:勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。